

世界仏教文化研究センター
リレーエッセー

コロナ社会で共に生きるために

No. 10

大きになつながら



親鸞浄土教総合研究班研究員
龍谷大学法学部教授
井上善幸

「もし、あなたが詩人であるならば、この一枚の紙のなかに雲が浮かんでいることを、はっきりと見るでしょう。」

この言葉は私が授業でよく紹介しているベトナム人仏教僧侶、ティク・ナット・ハン師の言葉です。いかがでしょう。雲が見えますか？たいていの人はまず見えなと思います。というより、何を言っているのだろう？という反応がほとんどでしょう。

「この一枚の紙」これは何でもかまいません。あなたの身の回りにある紙を手にとってみてください。メモ帳でもノートでも、チラシでもティッシュでも。そこに雲は見えますか？（初めてこの言葉を聞いたとき、私に雲は見えませんでした。）

ところで、目の前の紙は、ある日あるとき突然に、紙としてこの世に出現したのでしょうか？いえいえ、紙には原料があります。では、紙の原料は何でしょう。

それはパルプです。ではそのパルプの原料は？そう。樹木です。樹木があってこそ、今私の目の前に一枚の紙があるのです。

ではこの樹木、ある日あるとき突然に樹木としてこの世界に出現したのでしょうか？樹木が育つには日の光が必要です。そして、十分な水分をもたらす雨も必要ですね。では、雨を降らすのは？そうです。雲です。空に浮かぶ雲があってこそ、今、私の目の前に一枚の紙があるのです。

どうでしょう。手元の紙と雲とのつながりが見えてきましたか？このつながりが見えてくると、降りそそぐ陽の光、太陽も見えてきます。森を育む自然の営みが見えてきます。

ところで、森の樹木は、ある日突然紙になるわけではありません。そこには、林業に携わる人や製紙工場で働く人たちが関わっています。では、木を伐採する人や製紙工場で働く人は、ある日あるとき突然に、この世に従業員として登場してきたのでしょうか。そうではありませんね。その人が育ってきた家庭や友人、知人、職場の人々など、いろいろな出会いやつながりがあるからこそ、この瞬間、この瞬間の今があるのです。そして、このような関係性は、その人が育てている家庭や人間関係にも同様に見出せます。

このように想像を広げていくと、一枚の紙は世界全体、さらには宇宙全体にまでつながっていきます。そして、この発想は目の前の紙に限られるのではなく、ペンも、テーブルも、この私自身にも、そして、私を取り巻くすべての人、モノ、コトにも当てはまります。今この瞬間が大きなたつなぎの中で、さまざまなめぐりあいが織りなす結び目として起こっているという気付きからは、新鮮な驚きと新しい視点が与えられます。そして想像力がはたらき、さらなる気付きがもたらされます。

ところでこの気付きは、現実に実感できるものだけでなく、想像力によって構想されたものにも及びます。そして、この実感や想像力は、時に厄介なものでもあります。というのも、私たちはつい自分の都合や価値観に基づいて「大きなたつなぎ」を捉えてしまい、偏った見方や誤った先入観を懐いてしまうからです。

現在、先の見えない新型コロナ・ウィルスの流行が世界を覆っています。この不安の中で、私たちはお互いを気遣い、思いやりをもって接する姿に、いつも以上に気付かされます。でも、その一方で、悲しいことですが心の余裕がなくなったせいか、いつのまにか他者に対して攻撃的になったり、傷付けたり、あるいは傷付けられたりすることがあります。想像力による気付きは、お互いを思いやり支え合っていくさまざまなすがたや場面を描き出すこともあれば、好ましくない状況の原因を勝手に想像し、攻撃対象として特定しようとする妄想力として

もはたらきます。

仏教に限らず、長い歴史をくぐり抜けてきた宗教にはレンズのようなはたらきがあります。ふだん当たり前だと思っているこの日常世界、そして自分自身の生き方について、一步引き下がってパノラマで見渡したり、高い視点から俯瞰で捉えたり、あるいは1点にフォーカスしてクローズアップしてみたり。どこにピントを合わせるかによって見えてくるものも違います。そのレンズを通して見えてくるのは、つながり合い支え合って生きることの素晴らしさであったり、あるいはその逆にお互いに排除し疎外し合う醜さであったりします。どちらも私たちが抱える現実ですが、慈しみ育み合う関係を究極にまで推し進めたものを悟りの智慧と慈悲のはたらきであるとするならば、その反対に自分の都合を最優先させてしまう生き方は迷いであると言えるでしょう。

龍谷大学の建学の精神にはこのようにあります。

迷いとは、自己中心的な見方によって、真実を知らずに自ら苦しみを作り出しているあり方です。悟りとは自己中心性を離れ、ありのままのすがたをありのままに見ることのできる真実の安らぎのあり方です。

阿弥陀仏の願いに照らされ、自らの自己中心性が顕わにされることにおいて、初めて自己の思想・観点・価値観等を絶対視する硬直した視点から解放され、広く柔らかな視野を獲得することができるのです。

私見ですが、仏教は、現在私たちが直面しているコロナ危機のような緊急事態に対して有益な解決策を直接提示するタイプの宗教ではありません。その意味では、仏教からの発信は、危機回避にはほとんど役に立たないと言っていいでしょう。でも、仏教には危機回避の処方箋とは異なるはたらきがあります。それは言わば、対症療法ではなく体質改善のようなものです。危険要素を排除する技術としての知恵ではなく、場合によっては共存していくしなやかでしたたかな知恵であり、痛みを共有していくという人類の歴史が培ってきた知恵につながるものでしょう。長丁場になりそうですが、体質改善のチェックのためにも、仏教という鑑^{かがみ}に向きあう日々を送りたいと思います。

参考文献

ティク・ナット・ハン、棚橋一晃訳『仏の教え ビーイング・ピース ほほえみが人を生かす』中公文庫、1999年、pp. 68-72)

【著者紹介】

井上善幸（いのうえよしゆき）

専門：真宗学

共編：『問答と論争の仏教—宗教的コミュニケーションの射程—』（共編者マルティン・レップ、法蔵館、2011年）